2023年度　入学試験問題
（仙台・東京・東海・高松会場）

国　語

（６０分）

〔注 意〕

① 問題は㊀～㊂まであります。
② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

一　**次の文章は、みうらじゅん「マイ仏教」の一節である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。**

「機嫌」という言葉があります。

「機嫌を取る」「機嫌をうかがう」「機嫌を直す」。あるいは、「ご機嫌よう」「ご機嫌いかがですか」といったように、相手の様子をたずねる挨拶としても使われます。

「機嫌」という言葉自体は、「人の気持ちや気分。時機。都合」という意味があると辞書にはあります。

この言葉がもともと仏教用語だったことをご存知の方は、さほど多くないでしょう。

しかし仏教における①「機嫌」は、言葉の意味がだいぶ違ってくるようです。

「人々がそしりきらい、不愉快に思うこと」

もともとは「譏嫌」と書くようで、「譏り嫌うこと」ですから、かなりネガティブな意味だったようです。

その由縁は、修行にaハゲむお坊さんたちが、世間から「譏り嫌わ」れないように、「譏嫌戒」という戒律を設けたところにあるようです。「暴飲暴食をしない」など、世間様からお布施をいただくことで修行ができていることを、お坊さんたちが忘れないように厳しい戒律をつくったのです。それを破り、世間様の顰蹙を買えば、修行生活を営むことはできないからです。

この「譏嫌」が、やがて「機嫌」と記されるようになり、「人の気持ちや気分」という意味に転用されていったようです。

最近、この「機嫌を取る」ということの重要性についてよく考えます。

「人のご機嫌を取る」ということは、ご機嫌にいいことではないかと思うのです。

「人のご機嫌を取る」というと、「あいつは人の顔色ばかりをうかがっている」と、悪い意味にとらえられることもあります。しかし、家庭でも恋愛でも、人間関係が上手くいっていないときというのは、得てして相手の機嫌を取ることを怠っているときです。

「相手のことを思って行動する」のは、人間関係の基本です。相手の機嫌をちゃんと取って、「ご機嫌」になってもらえば、回り回ってこちらの「機嫌」も良くなります。

「機嫌を取る」ブームが起きれば、世の中少しはマシになるのではないでしょうか。

人の機嫌を取っているだけだと、「あいつは調子がいい」などと言われがちですが、人の機嫌を気にして生きていくことが、そんなに悪いことだとは思えません。

「ご機嫌を取る」と似たような言葉に、「相手の身になって考える」というのがあります。しかし「相手の身」というものが本当は

どういうものかわかるはずもありません。あくまでこれは「自分の考える相手の身」です。しかし「ご機嫌を取る」であれば、これは②「相手の身」にならなくてもできるはずです。

なかなかそう上手くいかないのが人間ですが、それも「修行」だとあきらめて、人の機嫌を取ろうではありませんか。

[Ⅰ]、「家のゴミを出してきて」と妻に頼まれた場合。「そうすれば妻が喜ぶのだから、ご機嫌を取るためにやろう」と思うか、「何で俺がゴミを出さなきゃいけないんだ」と思うか。

そもそも「機嫌を取る修行」を普段からしていれば、口ごたえもしないだろうし、妻に言われる前からゴミを出しているかもしれません。

人にご馳走するのも、機嫌を取る修行のひとつでしょう。恋愛にしても、女の子の機嫌を何とか取ろうと努力することであり、育児というものは、子どもの機嫌を取ることです。

いずれの場合も、トラブルが起きるのは、相手の機嫌を取ることを忘ったときばかりです。

お坊さんにしてもそうでしょう。檀家さんの機嫌を伺い、機嫌を取っていかなければ、お布施をするだけの檀家さんも気分が悪いし、「お坊さんは葬式のときだけいればいい」なんて陰口を叩かれてしまうのです。

ただ、「ご機嫌を取る」のが、ひとりだけの修行だと b ケッコウ辛いものがあります。自分だけが、人に奢り、人の話に耳を傾け、ゴミを出すばかりでは、どうしても「何で俺だけ」という禁句が出てしまいがちです。

ですから、「ご機嫌を取る」には、「コール・アンド・レスポンス」がもっとも重要になってきます。

それにしてもなぜ世の中では、「あいつはご機嫌取り」なんて、悪い意味で使われるようになってしまったのでしょうか。まさか「譏り嫌うこと」という語源となった仏教用語のネガティブな意味を、みなさんが知っていたとは思えませんし、そこまで仏教の影響があったとも考えにくいところです。

「ご機嫌取り」と言えば、「誰にでも良い顔をする奴」と、どこかバカにされている感じが否めません。しかしよく考えれば、人より気が利くということですから、悪いことではないはずです。

かつては「男は黙ってサッポロビール」。三船敏郎が出演したコマーシャルのように、他にも「不器用ですから」の高倉健のように、自分から機嫌を取りにいかない方が格好良い、とされる時代がありました。それを世の男性は憧れ真似するようになって、進んで「ご機嫌を取る」ことを考えなくなってしまったのではないでしょうか。

[Ⅱ] それは、それなりのルックスや力量が伴わなければ成立しません。誰もが真似できるわけではないのです。

飲み屋でもよく「家に帰ると、女房の機嫌が悪くてさあ」という発言が聞こえてきますが、その理由ははっきりしています。

［　X　］からです。そう発言した人間が当事者なのは明白なのに、「機嫌が悪くてさあ」と言うとき、どこか他人事で無責任な感じが付きまといます。つまり責任はすべて相手にある、という態度です。

そのようなとき一番いけないのは、「何でこの俺がそんなことしなきゃいけないんだ」というものです。

この「何でこの俺が」という言葉。

それは「ご機嫌界」で一番の禁句です。

このときの「何でこの俺が」という言葉には、様々な意味が込められています。「もう中学生でもないのに何で俺が」とか、「こんなに頑張って仕事をしている俺なのに」とか、「俺はアーティストなのに」とか、「俺」に込められた意味は様々です。それが[c]タイガイの怒りの原因です。

「もう中学生でもないのに、何で俺がガミガミ言われなければいけないのか」

「こんなに頑張って仕事をしている俺なのに、何でこんなに小遣いが少ないんだ」

「俺はアーティストなのに、何でこんなことをしなければいけないのか」

気になるのは、その③「何で俺が」と言うときの「俺」というのは一体何なのだろうかということです。

「何でこの俺がグリーン車じゃないのか」

これもたまに聞かれるセリフです。

ならば逆に「グリーン車に乗るお前」は何なのか、自分に聞いてみましょう。あくまでチケットを用意してくれた人が、諸事情を考えて「この人はグリーン車ではない」と判断しただけのこと。その人の判断が違っていることに腹を立てているということになります。

これまで、毎回グリーン車に乗っていたかもしれないし、たまたま三、四回乗っただけかもしれない。しかし一度でもそういう経験をすると、人は[d]オロかなもので、永遠にそれが続くと思い込んでしまうものです。

これに似た傾向として、「何か俺の周り、どうしようもないバカばっかりなんだよね」と言う人がいます。しかし「自分もその中の一人である」ということが、なぜかその人には見えていません。「今日の京都は混んでいるな」というのも同じです。自分がその中の一人であり、原因であることが見えていないのです。

［Ⅲ］、「何で俺が」と似たニュアンスの言葉に、「この私としたことが」という言葉があります。よく年配の方が口にする言葉で

すが、同様にその「この私」とは何なのか、という疑問を抱かざるを得ません。最近の若者の「俺的には」もそうだし、タクシーでよく聞く「俺に言わせりゃ」というのも同様ですね。

そのときの「俺」や「私」というものが一体何であるのか――。

先にも述べましたが、いくら「自分探し」をしても、その答えが出るはずがありません。いつの「俺」かも、どの「私」かもわからないわけですから。

それよりも、「自分をなくす」方が、はるかに具体的な解決になるはずです。

Ⅳ「機嫌を取る」＝「自分なくし」なのです。

「何で俺が」をやめて、相手の機嫌を取ることを考えた方が、人間関係がスムーズにいくことは明らかです。しかしこれは大変な「修行」です。けれど、人に喜ばれることは間違いありません。

「修行」にしても、自分のためだけではなく、人に喜ばれた方がいいはずです。なぜなら、自分のためだけに修行をした場合、どうしても「ここまでしたのに……」という、またよくわからない「ここ」が出てきてしまいがちです。

これが、自らの悟りを求める「小乗仏教」と、利他を目指す「大乗仏教」の違いのひとつではないかと思います（実際の小乗仏教と大乗仏教の二つが、そう簡単な理由だけで分けられるものではないとは思いますが）。

大乗仏教における「利他」を象徴する存在として、「菩薩（ぼさつ）」がいます。菩薩というのは、大乗仏教のシンボル的な存在で、「悟りを求める」と同時に、人々を教えに導く役割を担っています。

「自分だけ悟ればいい」という、小乗仏教的な「修行」を目的とするならば、「自分探し」を心おきなくすればいい。

しかし「人に喜ばれたい」という、大乗仏教的な「菩薩行」を目指すならば、④「自分をなくし」て、人の「機嫌を取る」ことを考えるべきです。

言葉ではそう簡単に言えますが、これは本当に大変な「苦行」です。私もこのことを意識して、「修行」に挑戦してみましたが、それはそれは辛い日々でした。修行が達成できたとは口がe＝サけても言えません。

それでも修行をする前よりは、確実に他人が優しく思えたし、その善意が好循環して、結果は決して悪いものではなかったと思います。

かなりの苦行であることは間違いありませんが、この⑤「ご機嫌を取る」ブームが起きれば、少しは住みやすい世の中になるのではないでしょうか。

問一　二重傍線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。楷書で丁寧に書くこと。

問二　空欄 Ⅰ ～ Ⅳ にあてはまる最も適当なことばを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。同じ記号は一度しか使えない。

ア　また　　イ　しかし　　ウ　たとえば　　エ　つまり　　オ　ところで

問三　傍線部①「『機嫌』は、言葉の意味がだいぶ違ってくる」とあるが、「機嫌」の現在の使われ方と、本来の使われ方として正しいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

i「現在の使われ方」

ア　身分の高い人が気分を悪くすること
イ　人の気分の良し悪しを表現すること
ウ　相手の様子をうかがいおもねること
エ　大切な人の身になって行動すること
オ　相手に褒められてうれしくなること

ii「本来の使われ方」

ア　不愉快な気分になって修行ができなくなること
イ　修行のために人びとからお布施をもらうこと
ウ　修行僧が規則を設けて厳しい修行をすること
エ　仏の教えに背いた修行僧が世間を敵に回すこと
オ　世間から援助されなくなるほど嫌われること

問四　傍線部②「『相手の身』にならなくてもできる」とあるが、それはなぜか。八〇字以内で説明しなさい。

問五　［　X　］に当てはまる文として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　その人のルックスや力量が伴っていない
イ　機嫌を取りにいかないことが流行している
ウ　日ごろ、その人が奥さんの機嫌を取っていない
エ　奥さんがその人の機嫌取りに気づいていない

オ　機嫌が悪くなる原因が自分にあると思っている

問六　傍線部③「『何で俺が』と言うときの『俺』というのは一体何なのだろうか」とありますが、このときの「俺」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分自身は特別で評価されるべき存在と考え、さらにその自分は他人から相応の見返りがあるべきだと考えている。

イ　他人ではなく自分自身が評価している自分であり、他人の自分に対する判断が違っていることに腹を立てている。

ウ　周囲に迷惑をかけているにも関わらずそのことが理解できず、他人の責任ばかりを問いつめ周囲を顧みていない。

エ　他人の意見に耳を貸すことなく自分の考えを押しつけようとし、ついには自分の考えだけが正しいと信じている。

オ　人に喜ばれることをしているつもりで、実際は周囲から煙たがられていることに気づかずわがままを言っている。

問七　傍線部④「『自分をなくし』て、人の『機嫌を取る』」とありますが、この話のエピソードとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　いくら苦行を続けても悟りに至ることができない僧はついに疲労のため倒れてしまいました。彼はある村娘から乳粥をもらい体力を回復させ、ついに悟りを開くことができました。

イ　ある国の王子が散策に出た時、東門で醜い老人、南門で病人、西門で葬列と出会いショックを受けました。最後に北門で清らかな僧と出会い出家を決意しました。

ウ　すばらしい琴の音色を聞いた王はそれを持ってくるように命じたところ、家臣が琴を持ってきたので、王は琴ではなく音色が欲しいのだと言って琴を捨ててしまいました。

エ　ある日、崖から下を見下ろした人が、そこに飢えた虎とその子ども七匹がいるのを見つけました。彼はためらうことなく崖から飛び降りて、その身を虎たちに捧げました。

オ　旅人が大きな川の向こう岸に行くためにイカダを作って渡りました。旅人はそのイカダは役に立つと考えて旅の間ずっと肩に担いで旅を続けました。

問八　傍線部⑤「『ご機嫌を取る』ブームが起きれば、少しは住みやすい世の中になる」とありますが、筆者がそのように考える理由を、本文全体をふまえて、七十字以内で説明しなさい。

二　**次の文章は、宮木あや子「手のひらの楽園」の一節である。長崎県の離島・松乃島で母子家庭に育った園部友麻は、本土にある私立夕陽ノ丘高校エステ科に進学するために島を離れた。学校の寮で暮らす友麻は、同室のこづえにずっと不機嫌な態度を取られ続けている。本文は、高校二年生になった友麻が、ゴールデンウィークの帰省を終えて寮に帰ってきた後、こづえと会話をする場面から始まる。これを読んで、あとの問いに答えなさい。**

鍵を開けて部屋に入っても、こづえの戻ってきた形跡はなかった。しかし夕飯を食べたあと、ベッドに寝転がって音楽を聴きながらうとうとしていたら部屋の扉が開いた。門限の九時を回る二分前だった。室内を通り抜けてカーテンを揺らした風に友麻は覚醒し、ヘッドフォンを外して身体を起こす。

「おかえりこづえちゃん」

こづえは浮腫んだ顔で［A］こちらを見て、居心地悪そうに机に向かった。運び込まれた荷物はスーツケースひとつだ。

「こづえちゃん蜂蜜好き？　キャンディもらったけんあげる。うちの島で作っとると、美味しかよ」

開封済みの袋に指を突っ込み、友麻は二粒取ってこづえに差し出した。

「……何その富豪みたいな発言、うちの島って」

お、と友麻は思う。めちゃくちゃ不機嫌そうなのに喋った。しかも彼女は友麻の手からキャンディを取った。懐きにくい猫が初めて手に顔を擦りつけてくれたときみたいな輝かしい気持ちで、友麻は［B］こづえの顔を見つめた。

「なに？　なんか言いたいことがあるならはっきり言えば？」

棘だらけの声でそう言ってこづえは背中を向ける。やっぱりいつもどおり不機嫌だった。

「いや、肌荒れヤバいなあと思うて。あと浮腫みもひどか。おうちでちゃんとご飯食べとった？」

「……本当にデリカシーないよね、あなた」

こづえの、怒気を孕んだ声に友麻は「これがデリカシーというものか」と学ぶ。しかしいつもクラスメイトと交わしているのと似たような会話だから、どこがいけないのか判らなかった。

「ねえ、こづえちゃん」

「なによ」

「私、こづえちゃんに比べるとだいぶバカやけん、こづえちゃんが何にいつもそんな腹を立ててるのか判らんのやけど、戻ってきたっ

てことは夏休みまではここで暮らすよね？　だったら、この部屋でお互い快適に過ごせたほうがよかと思うん。やけん教えてほしかとけど、いつも何にそんな腹を立てとうと？　学校では普通に過ごしとるよね？　こんなに怒りっぽいの寮でだけだよね？」

人の気持ちを考えた行動をしましょう、という寮生活の心得を念頭に置き、友麻はずっと「ここは島ではない」と自分に言い聞かせて暮らしてきた。一年生の最初のころ、ノックもなしに（注1）蒔田の部屋の扉を開けて、押し込み強盗と勘違いした部屋の住人たちの心臓を止めかけたときも、蒔田に「①ここはあなたの育ってきた島じゃない、プライバシーがあるんだよ」と諭されている。だから今も、なるべく彼女の神経を逆撫でしないよう、どこかにある地雷とか逆鱗とかを探りつつ避けつつ提案したつもりだったのだが、逆にこづえは身を乗り出して友麻に訊き返してきた。

「なんで平気なの？」

「え、え、ごめん、なにが？」

驚いた友麻が若干身を引きつつ尋ねると、深呼吸をひとつしてから②こづえは勢いよく話し始めた。

「ふたつある。まずひとつめは、私が今までこんなにあなたを怒らせるような態度を取っても一度もあなたが腹を立てなかったわけ。ふたつめ、自分の（注2）お母さんがどこで何をしているのか判らなくても平気な顔して生きてるわけ。バカっていうよりも、脳のどっかの部品が外れてるんじゃないかと思うんだけど」

「うーん……腹は立たんかなあ」

「私があなただったらむかつくよ、こんなルームメイト」

よく判らなかった。Ⅱ友麻は別にこづえの言動は気にならない。そして母のことに関してもうまく説明できない。自分と母は別の人間で、彼女が島を出たいと言ったなら仕方ないと思っていた。寂しいけど。

友麻は少し考えたあとベッドから降りて立ち上がり、ちょっと待ってて、と断り部屋を出た。

（中略）

「……いつもこんなことしてるの？　見つかったらどうなるの？」

不安げに辺りを見回しながら、非難がましくこづえが詰る。

「見つかったことないから判らんけど、たしか（注3）三枝さんの下僕になって調理場の掃除とかさせられるはず」

しまった、タオルとパフを忘れた。（注4）実習室にはコットンとティッシュしかないからクレンジングも洗顔もできない。友麻は実習道具の収納されたスチールラックの中から、精製水とキャリアオイルと様々な種類の精油の入った小箱を取り出し、キャスターに並

べた。あとコットンとティッシュと小さなボウルも。そしてこづえに向き直り言った。
「あんね、肌荒れと浮腫みがね、ものすごく気になると。だからそこのベッドに横になって」
「はぁ？」
Ⅲ「さっきの質問にもちゃんと答えるけん。もし見つかったら私がひとりで掃除するけん大丈夫。やけん早う」
友麻が急かすとしぶしぶといった様子でこづえは廊下側の、一番奥の台の上に靴を脱いで上った。友麻はキャスターを転がし、ベッドの横に着ける。そして手首に巻いていた髪ゴムでこづえの顔周りの髪の毛をまとめた。
「こづえちゃん、可愛いんだから肌荒れもったいなかよ、それに浮腫んどるんも」
「荒れようが浮腫もうが私の勝手でしょ」
悪態をつきつつも［C］してくれていたので、顔周りにティッシュを敷き、二枚のコットンに精製水を浸すと友麻はこづえの顎からこめかみにかけて両手でそれを滑らせた。化粧をしていた形跡はないから、これだけでも大丈夫だろう。顎、頬、額、そして顎下から首、まんべんなく汚れをふき取ったあと、キャリアオイルをボウルに出し、ラベンダーの精油とフランキンセンスの精油を一滴ずつそこに落とした。フランキンセンスはニキビに効く。そしてラベンダーには精神を落ち着かせる効果がある。よりニキビに効果的なティーツリーを使おうか迷ったが、肌が弱い場合は刺激が強すぎるため、二種類だけにしてオイルを手に取った。
「二十分くらいじっとしとってね。あ、念のためだけど、菊アレルギーなかね？　あと、普通の化粧水で赤くなってまうくらいの敏感肌やなかよね？」
こづえは眉間に皺を寄せたまま軽く頷く。ここで使用しているキャリアオイルは安価なサンフラワーオイルで、カレンデュラオイルや月見草油も同様だが、ごくまれに菊アレルギーの人が発症してしまうことがあるらしい。
オイルを取り、手のひらで揉んで温めたあと、顎からこめかみ、頬と額に塗布し、馴染ませるために軽くタッピングを施す。そしてあまり圧をかけずに親指を除く四本で顎裏から左右の耳の下まで両手で擦りあげる。フェイスラインにいくつもニキビができているのが可哀想だった。
「ねえ、これ何が目的なの？」
目を［D］瞑り、更に眉間の皺を深くしながらこづえが問う。
「なんか、この状況やったら普通にお話しできるかなあと思うて。こづえちゃん逃げ場ないし」
肌や髪に手を触れられていると人は b饒舌になる。母も叔母もそうだった。単純に身体的にほぐれると気持ちもほぐれる。

片方の手を耳の下に置いたまま、もう片方の手で顎から頬の下部を通り耳の下へ擦り上げる流れを左右繰り返す。手技では必ずどちらかの手が肌に触れていなければならない。片手を移動させるときはもう片方の手は始点か終点にある。右手中指で左の小鼻から右の眉頭まで、左手では反対側を同様に、鼻筋を交互に何度か擦り上げ、その流れで額を引き上げ、フェイスラインに沿って指先を顎まで戻す。こづえの眉間の皺が浅くなってきたころ、友麻は施術をつづけながら口を開いた。

「お母さんがどこにおるか判らんでも平気なのは、私が『好きにしたらいい』って言うたから。本当は中学出て働くつもりやったし、高校生になってまでお母さんに頼りきりって、私の家の場合、できんかったから。でもこれが普通やないことは判っとうよ。両親揃うとっておうちでお母さんが作ったご飯食べよる家に行くと、いいなあ、とは思うとった。親が学費出してくれるのも羨ましいけど、それは将来働いて返すなら奨学金でも同じやけん。私のお父さんは私が生まれる前に事故で死んだらしいけど、写真もないからどんな人なのかぜんぜん判らんし、島の人、誰もお父さんの話せんの。ええと……なに話しとったっけ？　伝わっとう？」

「うん……本当に話すの下手だったのね……でも伝わってる」

「良かった。でね、こづえちゃんに腹を立てないのは、別にこづえちゃん、私を嫌っとるわけじゃなかけん。私に面と向かってバカとか言うたことなかやろ。ただ態度がすごく偉そうなだけやろ。なにか理由があるんやろうなあと思うとったけど、私、本土人との距離の計り方が判らんで、あんまり突っ込んだこと話すのはよくないみたいやけん、その理由は訊かんほうが良かとやろうかって」

「……」

「こういうのって、訊いても大丈夫なんやろうか、話してもらえんかな、こづえちゃん」

浮腫みに効くと言われている顔面のツボ、一度では名前も場所もぜったいに覚えられない巨醪・迎香・客主人・下関・頰車の五ヶ所を親指で順繰りに押してゆき、顎下を通って引き上げたこめかみから耳の前を擦り下ろし耳下腺を押すと、たいへん詰まっていた。これは痛いだろうなあ、と思いつつ首を持ち上げて横を向かせ、胸鎖乳突筋に沿って軽く圧をかけたら、案の定こづえは「痛い」と呻いた。

「ここが顔の浮腫みの原因やけん、ちょっと我慢して」

指を進め鎖骨の中に流すとこづえはまた痛みに呻いた。しかしこの硬さでは悶絶する痛みだろうに、[E]呻いただけである。

「私は……」

痛みに顔を顰めながら、こづえは苦しそうに呟く。

「なに？」

「痛い」
Ⅳ「うん、痛かやろうね、可哀想に」
反対側を向かせ、同じ動作を繰り返す。一年生の最初のころ、座学に「エステティックカウンセリング」の授業があった。傾聴、受容、共感、浄化。本来ならカウンセリングは施術の前に行うべきで、今のこの状況は、友麻が無理やりこづえを連れてきて強引に施術している、というイレギュラーにもほどがあるケースだが、最初の三つがうまくできれば、肌に手を触れている時間、相手が話しやすい場を作れる。
「こづえちゃんは我慢強かね」
親指の腹で石のような耳下腺を押しながら友麻は呟いた。
「……ずっとそう思われてた、家族にも。だから置いてっても平気だと思われた、私」
「そっか」
「自分の意思で入った学校をやめるくらいなら、親子の縁切るって。神戸に行っても私の居場所ないって」
「……そっか」
頭を元の位置に戻し、オイルを足した手を首のうしろから背中へ差し入れようとしたとき、こづえが両手で顔を覆った。洟を啜りながら小刻みに震えるこづえに、友麻は箱からティッシュを三枚くらい取り出し、指に触れさせる。こづえはそれを取り、目の上に押しあてた。
Ⅴ「目にオイルが入ると次の日腫れるけん、気をつけて」
「うん」
おそらくもっと何か深い事情がある。しかしこれ以上の話を聞きだすのは今は無理だろう。③声を殺して泣くこづえの首のうしろから手を入れ、僧帽筋を両手で圧迫し、中指と薬指で圧をかけながら頸椎へ。何度か繰り返し、最後にぼんのくぼからうなじの生え際内側にある天柱と外側にある風池を指圧し、軽く揺さぶる。
「これでひととおり終わりなんやけど、どっかほかにやってほしいところとかある?」
友麻の問いにこづえは鼻水まみれになったティッシュを丸め、「耳を塞いで」と答えた。新たに取ったティッシュで手のひらを拭き、言われるまま友麻はこづえの顔を挟み込むようにして両の耳に手のひらを押し当てた。外気が暖かくても、大体の人は耳だけは冷たい。ホットタオルがあればもっと気持ち良かっただろう。はー、と湯船に入ったときのようなため息を漏らし、こづえは勢いよく洟

を啜り上げた。そして「④ありがとう」と言った。

（注１）蒔田　…　友麻と同じ高校に通う先輩。
（注２）お母さん　…　友麻の母は、友麻が高校進学した後に失踪してしまっていた。
（注３）三枝さん　…　友麻の生活する寮で働いている調理場担当。
（注４）実習室　…　こづえは友麻に連れ出され、二人が通う学校のエステ科が使う施術室にいる。

問一　二重傍線部ａ「デリカシー」がない、ｂ「饒舌になる」の本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ａ「デリカシー」がない
ア　私利私欲を求めない　　イ　他人への警戒心がない
ウ　相手への気配りがない　　エ　相手の都合を考えない
オ　自分中心に物事を考えない

ｂ「饒舌になる」
ア　安心しておしゃべりになる　　イ　警戒して怖がりになる
ウ　親しくなって優しくする　　エ　苛立って荒々しくなる
オ　臆病になって無口になる

問二　［A］～［E］に当てはまる最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。同じ記号は一度しか使えない。

ア　まじまじと　　イ　じっと　　ウ　ちょっと　　エ　ちらりと　　オ　ぎゅっと

問三　傍線部①「ここはあなたの育ってきた島じゃない、プライバシーがあるんだよ」とあるが、どういうことか。六十字以内で説明しなさい。

問四　傍線部②「こづえは勢いよく話し始めた」とあるが、この時のこづえについて説明したものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　こづえは自分の態度を無視して話しかけてくる友麻に興味がわき、自分のことを理解しようとしてくれないならば逆に自分が友麻を理解してあげようと意気込んでいる。
イ　こづえが友麻への嫌悪感をあらわに接しているのにも関わらず、友麻がこづえの気持ちを一生懸命なだめようとしてくること

を不満に思い、苛立ちが収まらなくなっている。

ウ　こづえが友麻に対して不機嫌な態度で距離を取って接しているのにも関わらず、友麻がそれを一切理解せず無神経に話をしてくることに耐えかねて、不満があふれ出している。

エ　こづえは友麻が他人の気持ちを考えない言動をするのはわざとではなく、友麻なりに気を使って話をしていることにようやく気が付き、友麻とちゃんと話をしたいと意気込んでいる。

オ　こづえがどんなに怒った態度を取っても友麻は今まで一切気が付かなかったのにも関わらず、初めてこづえの言葉に驚く反応を示してくれたことを嬉しく思い、気持ちが高揚している。

問五　傍線部③「声を殺して泣く」とあるが、なぜか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　誰にも話すことができなかった自分の悩みをようやく友麻に相談することができて安堵したが、夜の学校では大声を出せないため感情を抑えたから。

イ　家族とうまくいかない自分の悩みを勇気を振り絞って打ち明けてみたものの、母親が失踪しても平気な友麻からはなぐさめの言葉をもらえず、辛く思ったから。

ウ　家族とうまくいかない悩みは他人である友麻には解決できないことであると分かっているので、もうしばらく我慢していればいつか解決できるだろうと思っているから。

エ　自分の悩みを相談するまでに友麻との距離は縮めることができたが、心の内では家族ではない友麻を信用しきることはできないため、全てをさらけ出せないことを残念に思ったから。

オ　ずっと一人で抱え込んでいた悩みを、家族以外の人間に打ち明けることができたが、友麻には今まで距離を取って不機嫌な態度で接してきた分、泣く姿を見せるのがためらわれたから。

問六　傍線部④「ありがとう」とあるが、この時のこづえの気持ちを七十字以内で説明しなさい。

問七　次に示すのは、本文を読んだ後に、五人の生徒が友麻の人物像について話し合っている場面である。最も適当な意見を話している生徒を一人選び、記号で答えなさい。

ア　生徒A―相手の気持ちを全く考えようとしない波線部Iのような言葉を、こづえにぶつけていたのが印象的だったな。もともと友麻とこづえは仲良くできていないのに、こんなことを言えるって、友麻が意地悪な人物じゃないとできないよね。

イ　生徒B―こづえの友麻に対する態度や口調も結構きつかったよね。何もしていないのにそんな態度を取られたら、私なら逆に

怒ってるかも。でも友麻って波線部Ⅱから分かるように、全然気にしてなかったし、他人の言動に興味がない人物とも言えそう。

ウ　生徒C―そうかな？波線部Ⅲから、こづえと向き合おうとしているのが分かるよ。他人に興味がないわけじゃなく、他人との接し方が分からないだけだよ。だから、こづえに施術をするまでは、仲良くなる方法が分からず、こづえを避けていたんだよ。

エ　生徒D―なるほど。友麻が傾聴、受容、共感、浄化の施術の流れにきちんと沿ってこづえに施術したことで、こづえとの距離も近くなっていったね。波線部Ⅳのような発言ができたのも、友麻が施術のマニュアルをきちんと理解できていたからだね。

オ　生徒E―私は波線部Ⅴが印象的だったかな。泣いているこづえが涙を隠そうとするから、気付かない振りをしてあげてるんだよね。これまで相手の気持ちを考えず踏み込んだ発言が多かったけど、友麻なりに実は相手のことを考えていたんだね。

問題は次のページに続きます。

三　次の文章は、「大鏡」の一節である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

①さるべき人は、とうより御心魂のたけく、御まもりもこはきなめりとおぼえはべるは。

花山院の御時に、五月下つ闇に、②五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかきたれ雨の降る夜、帝、③さうざうしとや思し召しけむ、i殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましけるに、人々、物語申しなどしたまうて、昔恐ろしかりけることどもなどに申しなりたまへるに、「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。x かく人がちなるだに、気色おぼゆ。まして、もの離れたる所などいかならむ。遠く離れた人気のない所などは相当不気味に思われるだろう さあらむ所に一人往なむや」と仰せられけるに、（そばにいた者たち）「④えまからじ」とのみ申したまひけるを、道長は、「いづくなりともまかりなむ」と申したまひければ、さるところおはします帝にて、「いと興あることなり。a さらば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け」と仰せられければ、よその君たちは、便なきことをも奏してけるかなと思ふ。また、うけたまはらせたまへる殿ばらは、御気色変はりて（お顔色が変わって困った事だと思っていらっしゃるのに）、益なしと思したるに、道長は、y つゆさる御気色もなくて、「ii私の従者をば具しさぶらはじ。この陣の吉上まれ、滝口まれ、一人を、『昭慶門まで送れ』と仰せ言賜べ。それよりうちには一人入りはべらむ」と申したまへば、（帝）「証なきこと（それでは証拠がないことだ）」と仰せらるるに、「げに」とて、z 御手箱に置かせたまへる小刀申し立ちたまひぬ。いま二所も、苦む苦む各おはさうじぬ。（他の二人も苦々しい顔でそれぞれおでかけになりました）

「⑤子四つ」と奏して、かく仰せられ議するほどに、⑥丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門陣より出でよ。道長は承明門より出でよ」と、⑦それをさへ分かたせたまへば、しかおはしましあへるに、iii道隆、陣まで念じておはしましたるに、宴の松原のほどに、そのものともなき声どもの聞こゆるに、術なくて帰りたまふ。iv道兼は、露台の外まで、わななくわなくおはしたるに、仁寿殿の東面の砌のほどに、軒とひとしき人のあるやうに見えたまひければ、ものもおぼえで、「身のさぶらはばこそ、仰せ言もうけたまはらめ」とて、おのおのたち帰りまゐりたまへれば、御扇をたたきて b 笑はせたまふに、道長はいとひさしく見えさせたまはぬを、いかがと思し召すほどにぞ、いとさりげなく、ことにもあらずげにて c まゐらせたまへる。（道長がたいそう長くお見えにならないので「どうしたのか」とお思いになっていらっしゃる時に）（帝）「いかにいかに」と問はせたまへば、いとのどやかに、御刀に、削られたる物を取り具して奉らせたまふに、（帝）「こは何ぞ」と仰せらるれば、（道長）「ただにて帰りまゐりてはべらむは、証さぶらふまじきにより、高御座の南面の柱のもとを削りてさぶらふなり」と、つれなく申したまふに、いとあさましく思し召さる。こと殿達の御気色は、いかにもなほ直らで、v この殿のかくてまゐりたまへ（ほかのお二人のお顔色はなんとしてもやはり直らず）

るを、帝よりはじめ感じののしられたまへど、うらやましきにや、またいかなるにか、ものも言はでぞ[d]さぶらひたまひける。

なほ、うたがはしく思し召されければ、つとめて、(帝)「蔵人して、削り屑をつがはしてみよ」と仰せ言ありければ、持て行きて押しつけて見たうびけるに、つゆ違はざりけり(全く違わなかった)。その削り跡は、いとけざやかにてはべめり。末の世にも、見る人はなほあさましきことにぞ申ししかし。

問一　傍線部①「さるべき人は、とうより御心魂のたけく、御まもりもこはきなめり」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　道長のような栄華をきわめる人は、若い時から肝が据わっており、神仏の加護も強いようだということ。
イ　道長のような栄華を掌中にする人は、豪胆でありながらも御まもりに頼ることも多いようだということ。
ウ　道長のような人の上に立つ人は、人より発想力に富むばかりか、人からの信頼も厚いようだということ。
エ　帝のような人の上に立つ人は、人より発想力に富み、人に信頼されることも多くあるようだということ。
オ　帝のように栄華をきわめる人は、若い時から気難しく、神仏の加護などなくてもよいようだということ。

問二　Ⅰ・傍線部②「五月」の読み方を、月の異称で答えよ。Ⅱ・また、傍線部⑤「子(ね)」とは「午前0時頃」、傍線部⑥「丑(うし)」とは「午前二時頃」を指す。「昼の十二時頃」を表す漢字を一字で記しなさい。

問三　傍線部③「さうざうしとや思し召しけむ」、④「えまからじ」、⑦「それをさへ分かたせたまへば」の訳としてふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

③「さうざうしとや思し召しけむ」
ア　雷雨の音がわずらわしくお思いになられたのだろう
イ　伺候する人々の声がうるさく感じられるのだろうよ
ウ　することがなく暇だとお感じになられるのだろうよ
エ　手持ちぶさたで寂しくお思いになられたのだろうか
オ　雨の降る音がうるさくお感じになられたのだろうか

④「えまからじ」

ア　参りますまい

イ　参れますまい

ウ　参りましょう

エ　参れましょう

オ　参りましたか

⑦「それをさへ分かたせたまへば」

ア　行く人までも別々にしなさったならば

イ　行く人まで分別をつけなさったならば

ウ　行く人まで分別をおつけになったので

エ　道筋まで別々におさせになられたので

オ　道筋まで別々にさせなさったのならば

問四　二重傍線部a「さらば行け」、b「笑はせたまふ」、c「まゐらせたまへる」、d「さぶらひたまひける」とあるが、それぞれ主体（主語）は何か。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　帝　イ　道長・道隆・道兼　ウ　道隆・道兼　エ　道長　オ　道隆　カ　道兼

問五　太線部x「かく人がちなるだに、気色おぼゆ」を訳しなさい。（「かく」は「このように」、「人がちなり」は「人が多い」、「だに」は「さえ」と訳をする。）

問六　太線部y「つゆさる御気色もなく」とあるが、どういうことか。人物を明らかにしながら、三〇字以内で説明しなさい。

問七　太線部z「御手箱に置かせたまへる小刀申して立ちたまひぬ」とあるが、どうして道長は小刀を借りて出かけたのか。二十五字以内で説明しなさい。

問八　波線部の解釈として、ふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　i　帝の前で、管絃の遊びから、殿上人たちのよもやま話、そして恐怖譚に転じていく。

イ　ii　不正無きよう自分の従者ではない者に門まで送ってほしいと道長は帝に頼んでいる。

ウ　iii　道隆は陣までは我慢していたが、得体の知れぬ声々に恐怖して戻ってきてしまった。

エ　iv　道兼は震えながら進んでいたが、仁寿殿で人と思えぬ大きさの者を見て戻ってきた。

オ　v　神聖な場所である大極殿の柱を削った道長に対して、帝は怒りを抑えられなかった。